

私の一番うつくしい色は赤だ。例えば熟れた蛇母の赤、あんなに口に入れたくてたまらなくなるのに肩透かしを食らうような味がする。ポインセチアの赤、椿なんかより少し乾いた花弁をしている。ルビーの赤、ずっと見てたらわるいものに魅入られてしまいそうですぐに目をそらしてしまう。お隣のお姉さんの口紅の赤、お母さんは「派手すぎる」「はしたない」というけれど誰の目にもとまらない地味なコーラルピンクなんかより全然いい。それに生き物の身体の赤、生肉とか理科の教科書に載ってる人の内臓とかを見るとこんなものが自分の身体の中にもあるんだとどきどきするし、こんなに赤い液体がきちんと私の中でも泳いでるんだと思うと自分のからだが愛おしくなる。

## 水面

そして、私を一番うつくしくない色は赤だ。髪の毛は一見すると黒だが、陽の光に照らされると重たい茶色になる。黄味が強い肌に、瞳に光が入るのを邪魔する下向きに生えた睫毛。いつも影の中を歩いてるみたいな顔をしている、と言われたことがある。鮮やかな赤が私の腕の中に飛び込んだ途端にくすみ始めて、その呼吸も瑞々しさも何もかも失われるのだ。しかし、私の部屋には可哀そうなことに、こんな舞台にやってくるようになってしまった赤の残骸たちがいる。彩度を抑えた朱色のハイネックのセーター、冬に映えるだろうと思つて奮発して買ったワインレッドのマフラー、昔昔にお菓子のおまけでついてきた「ルビー」の指輪、似合わないと分かっていたけどどうしても唇に乗せてみたかった真紅のリップ。みんなみんな私なんかのところに来ちゃったから死んでしまった。だからもう赤を連れてこない、そう思つてただだけれど今日塾の帰りにふと立ち寄ったドラッグストアのネイルコーナーで足を止めてしまった。「シグナルレッド」と

いう色が目に飛び込んだ。鮮やかな、でも柔らかさもあつた。少し派手すぎるけど、足の爪に塗るならいいかもしれない。もうサンダルを履くには風が冷たいけれど、私はどうしようもなくその赤が欲しくなつて、色の付いていないリップクリームとともにレジへ持つていった。

\*

朝起きて合服を着るか冬服を着るか迷うようになった。夏用のスカートの薄さは心もとないけれど、冬用の重みは少し鬱陶しいなと思つて、季節が変わつた実感もなかつた。通学路にある緑色の屋根の家は人が住んでいるのだろうかというほどにひっそりとしているが、低めの塀から覗く手入れの行き届いた庭が住人の存在を感じさせる。少し前まで盛りだったケイトウが茶色っぽくなつていく。次は何の花が咲くのだろう、とぼーっと立ち止まつてしまつていくことに気づいて、再び学校に向かつて歩き出す。

服装検査がある日の朝は風紀委員は十五分早く登校しなければならぬ。といつても私はいつもその三十分前には学校にいたので、今朝も特に急がなければならぬということはないのだが。

いつもより五分早く着いた教室は、いつも通り人が少なく静かだった。騒がしくなるのは登校時間の十五分前ごろからだろう。今のうちに、と思ひ廊下の棚に置かれた花瓶の水を替えるために席を立った。ピンク色のコスモス、白々しい赤色をしているから私はあまり好きじゃない。水を替えるついでに少し茎も切っておこう。切り花を長持ちさせるためには水を替える時に少し茎を切つてやるといい。ゴミ箱の上でばちん、と刃が合わさ

る音がして、一センチほどの黄緑色が落ちる。切り花の断面を見ると私はどうしても痛々しく感じてしまうが、それで花たちはどう思うのだろうか。永くうつくしくあるための代償だとも思うのだろうか。湿り気のある花弁は私に呼吸を思い出させた。

\*

「えっ、今日服装検査だったけ？」  
教室の方から賑やかな声が聞こえてくる。

「朱理、忘れてたの？ 相変わらずだね〜」  
一人の少女を囲む複数のこれまた少女たちが呆れながらも楽しそうに笑った。朱理、と呼ばれた少女はクラスメイトで、テニス部に入っているがあまり練習にはいっていないらしい。最もうちの学校のテニス部は強豪というわけでもなく、顧問の先生も厳しくないので幽霊部員がそこそこいるのだ。

「うわ最悪だ。分かってたら朝メイクしなかったのに。あたし、アイブロウ見つかんなくてバス一本逃したんだよ〜？」  
あんたが毎回忘れてるからでしょ、と周りに笑われながら、彼女はカバンの中を「そこそこかき回して、クレンジングシートを探している。校則を律儀に守ってメイクをしてこない生徒が多いうちの学校で、彼女たちのグループは少し派手で目立っていた。色付きのリップバームすら禁止というのは少し古臭いように思えるが、それを変えたいと思っている生徒もあまりいないからずっとそのまま。進学校とまでは呼べないがスポーツが強いわけでも卒業後の就職率が高いわけでもない中途半端な偏差値の高校と、そこに集まるそこそこまじめで目立つの

が好きじゃない生徒。周りがすっぴんならそのほうが楽だしそれでいいやというのが多数派の意見だ。

「ちよっと落としてくる〜」

彼女、朱理、いや高浜さんはそういつて教室を出ていった。ああメイク落としちゃうのか、もったいない。もったいない、そう思った。生活指導の藤原先生が見たら一発で指導をくらうであろう赤みがかかったリップは彼女によく似合っていたから。朱理という名前と同じくらいに。それと同時に見てみたいと思った、素敵なものが台無しになるところを。折角作った砂のお城を壊すみたいに、ジェンガをつついて倒すみたいに、人がその人自身にふさわしいものをわざわざ手放すところを。何気なく席を立てて教室を後にする。朝練の終わりの挨拶がグラウンドの遠くから聞こえて、教室に人が集まり始める。今年の初めに改修工事が終わって綺麗になったトイレのドアを開けると、始業前なので数人の女子が並んで待っていた。私は列に並びつつ、メイクを落とす高浜さんをつつそりと鏡越しに見ていた。目元を「ごしごしと擦る。うっすらと血管が透ける薄い皮膚が擦られたほんのりと赤みを持つ。少しだけ跳ね上げたアイラインが落ちると目元が柔らかくなった。上から順に降りていって頬を擦る。わざわざしてきたメイクを落とすことになった落胆からか若干手つきが荒い。擦られた頬はまた少し赤くなつて、ファンデーションで隠していたであろうそばかすが少しだけあるのが分かる。次にリップ。なぜか心臓の近くがざわざわする。失ってほしいし、輝いてほしい。赤みの強いピンク色のリップが載せられた唇も擦られていく。シートで拭いた後の少し湿った唇は、リップを付けていなくても血色がよいピンク色をしていた。鏡から目を逸らす。

なんだろう、彼女は台無しにならない。彼女は手に入れてもそれを殺さないし、手放しても影を落とさない。なぜだろう。私と何が違うんだろう。私とは全部違う。列はいつの間になくなって自分の番が回ってきたけど、私はそのまま女子トイレから立ち去った。

\*

ずっと考えていた。今日一日考えていた。古典の時間も生物基礎の時間も世界史の時間も。私もそれと一緒に学校にいつてみたいと。でも彼女のようにはできないと。明日の英語の予習もあまり手につかず、勉強机に向かつてはいるがノートと教科書を開いたままぼーっとしている。誰にも見えないように、誰にも気づかれないように、それと一緒に学校に行く。でも、私は高浜さんじゃないから。

はっ、と思い出す。そういえば、とこの前塾の帰りに寄ったドラッグストアの紙袋を手取る。あつた、シグナルレッドのマニキュア。足の爪なら靴下も靴も履いているから誰も分らない。やりかけの予習はとりあえず置いておいて、私は初めてそのネイルのふたを開けた。椅子の上に片膝を立てて座り、はみ出さないように慎重に塗っていく。左足は小指から、右足は親指から。普段ペディキュアを塗ることはほとんどないから、何度か失敗したが無事塗り終えて、乾く前にどこかについてしまわないうように慎重に足を降ろす。乾かしながら放り出していた予習を再び始めると、終わるころにはもう0時を回ろうとしていた。早く寝ないととまじいな、と思いつつも、そんなにいやな気持ちじゃなかった。興奮して値付けないことを心配したが、気づいたら眠っていて遠足の

前の日の子供みたいな夢を見た。

\*

この日は生まれて初めて、朝起きてからパジャマを脱ぐよりも先に靴下を履いた。家族にも秘密だったからだ。今日、私の爪は赤い。変わり映えない通学路も、いつもと違って見えた。空気は少し澄んでいる気がした、鳥の世界は素晴らしいんだぞ、と喚かれているような気分だったが、不思議とそれも不快じゃなかった。いつもは意識しない靴音が世界中に響いている気がした。

まだ人が少なく静かな校門をくぐると抑えきれない程の高揚感が胸の中で育つのを感じた。こめかみがしんじんと熱くなる。教室に着いたのはいつも通り少し早めで、本でも読みながら始業時間を待とうかと思つたが、文字列の上を目が滑つて内容が頭に入つてこない。私の席の横を人が通るたびにびくりと背筋を伸ばす。教室に人が入ってくるたび胸がどきどきする。時計の針を何度も確認してはつま先を軽く床に当てる音を鳴らしてみる。学校指定の白い靴下、黒のローファー、その下。その下の爪はシグナルレッドに塗られていて。塗られていても私は何食わぬ顔をして座っている。ページが進まない本を手で弄びながらこの高まりをひた隠しにしている。シグナルレッドは緊張と興奮をパレットの上で混ぜたような色だ。この時思った。いつもより時間が経つのが遅いように感じる。昨日済ませたので今日は必要ないのだが、花瓶の水でも入れ替えようかと廊下へ向かう。

すると、いつもはもつと遅くに来るはずの彼女が廊下の向こう側から歩いてくるではないか。私は思わず叫び

たいのをこらえて、水を替えようとするふりをして花瓶に手を伸ばした。私の手の熱で花瓶の水が沸騰するかもしれないと思つた。高浜さんとは同じクラスで話したこともないけれど、今日なら言える気がした。朱理つて名前ずっと素敵だと思つてたつて。花瓶を持った私のすぐ後ろを彼女が通り過ぎ、教室のドアに手をかける。今日の私は爪が赤いから。だから。

「高浜さん！ あの」

突然呼び止められた彼女がぱつとこちらを振り返る。

大して話したこともない地味なクラスメイトに声をかけられて少し不思議そうな顔をしていた。誰にも見えない足の先にぐつと力が入るのが分かる。

「あの、私ね、前から」

と口ごもつた時。

「朱理！ 今日は早いじゃん、珍しい」

高浜さんを朱理、と呼ぶ友人たちが彼女を見つけかけて声をかける。投げかける相手がいなくなった言葉が、私の足元、廊下の冷たい床に落ちて転がっている。数人の女子の群れは笑いあいながら教室へと入っていった。さつきまでぐつぐつと煮立っていたコスモスの水は、今はしんと常温になっていた。

帰りに除光液を買って帰ろうと思つた。